

説明文

沖縄は太平洋戦争の戦禍により、壊滅的な被害を受け、荒廃し、県民は焦土と化した地で食糧難に苦しみ、過酷な状況下での生活を強いられました。そのような惨状は、米軍に招集され、沖縄戦を直接体験した帰還兵や通訳兵により、様々な形でハワイに伝えられました。中でも、沖縄戦に従軍した比嘉太郎氏の報告は、ハワイのウチナーンチュの心を揺さぶりました。

「島に人影なくフル（昔の豚小屋）に豚なし」

貴重な食糧で戦前は10万頭以上いた豚が7,731頭（1946年の琉球政府記録）にまで激減するほど、沖縄は困難な状況にあったのです。

故郷である沖縄が悲惨な状況で助けを必要としている、沖縄の復興をなんとか支援できないか、郷里を憂えたハワイのウチナーンチュはそう考え、多くの支援団体が設立されました。その中の一つ、「布哇連合沖縄救済会」は生きた豚を送って古里の復興を支援しようと考えました。豚は食糧となるばかりでなく、その糞尿は堆肥となり畑を豊かにし、育った作物はまた食卓へ還ってきます。食の要である豚を送れば沖縄は大丈夫と考え、募金集めに奔走しました。メン

バーの懸命な努力とハワイのウチナンチュの温かい志のおかげで、豚を購入する費用として5万ドル（当時の沖縄の公務員月給が25ドル）もの寄付が集まりました。

購入した豚は550頭。沖縄まで運ぶ船はオーウェン号。乗り込むハワイのウチナンチュは七名の勇士でした。

1948年8月31日、オーウェン号は沖縄に向けて出港しましたが、激しい暴風雨や高波に襲われ、航海はまさに命がけとなりました。また、戦争で残された洋上に浮遊する機雷を避ける航路をとったため、航路が長くなり、3週間を過ぎた頃から乗組員の飲料水や豚の飼料が底をつきかけました。

それでも七勇士は郷里を愛する強い意志で結束し、沖縄を目指しました。様々な困難を乗り越え、迎えた28日目の9月27日、ついに沖縄の島影が見えました。

オーウェン号はうるま市勝連平敷屋のホワイトビーチに到着しました。ハワイのウチナンチュが決死の覚悟で送り届けた豚は、広く公平に分配され、4年後には10万頭になり、沖縄県の養豚業を復活させ、食糧難を解消するなど、戦後復興に大きく貢献しました。今もこうして豚食が沖縄の代表的な食文化として継承され、沖縄の

日常の食卓にのぼることは、この時のハワイからの豚のおかげです。

ハワイを中心に始まったこの動きは、やがて米本土や南米へ広がり、世界中のウチナンチュから温かい支援が沖縄へ届きました。このように我々は多くの人に支えられて生きていることを忘れてはなりません。

この史実はうるま市によりミュージカルとして上演され、また教科書や学習発表会など学校の教材として活用されるなど、次代を担う子ども達に語り継がれております。

「海から豚がやってきた」記念碑建立実行委員会では、この史実をより多くの方々に知ってもらうため、県や関係市町村、畜産関係者と一丸となって記念碑建立の募金を広く募りました。その結果、趣旨に賛同された個人、団体、企業など多くの皆様から寄付をいただき、この記念碑建立は実現することができました。

平成 28 年 3 月 5 日

「海から豚がやってきた」記念碑建立実行委員会